

安原地区歴史研究会だより

1、安原町十王堂が松本十二薬師めぐりの第四札所

2月の安原地区歴史研究会の例会において、「松本十二薬師をめぐる会」会長の飯島恵道東昌寺住職を講師に迎え、「松本十二薬師めぐり」の勉強をしました。

①薬師如来信仰とは

薬師如来は瑠璃光浄土の教主で菩薩の時に12の大願を立てて、人々の病患を救うとともに悟りに導くことを誓った仏で、古来、医薬の仏として信仰されてきました。



飯島恵道住職による講演

松本十二薬師とは、松本地方に伝わる12か所の薬師札所を言います。松本十二薬師については、成立年代やいつ誰によってはじめられたのか、わからないことばかりでしたが、松本の歴史研究家による論文集『史談会報』の中に、『下金井薬師と松本十二薬師～村の小さな一つの記録～』なる論文があり、昭和時代に書かれたものですが、下金井薬師の縁起と**松本十二薬師の札所名と御詠歌**が記されていて、非常に貴重な資料でした。

松本十二薬師巡りをお勧めしますが、市内蟻ヶ崎にあります第一番札所生安寺には、歴史的な地蔵像が建っています。木曾義仲・巴御前の長子・義高の弔い像です。



第三番札所東昌寺全景



第一番札所生安寺に建つ地蔵像

②安原町十王堂について

安原地区の十王堂は、**第四番札所**です。松本城を構築した石川氏により城下町の南・東・北口に十王堂を建て、町民の安定と町内の鎮護を祈願したと言われていています。安原町十王堂は、松本城下町最北端の安原町の出入り口東側にありました。当時、上横田町浄土宗林昌寺の末寺として、「末寺 松本安原町十王堂」と載っています。

ただし、安原町十王堂の本尊は不明で、十王（閻魔王）で薬師如来ではないのですが、松本十二薬師に入った理由は以下のように想定されます。安原町十王堂は、林昌寺の末寺になっていたため、十王の本地仏（閻魔王は地蔵菩薩、泰山王は薬師如来、初江王は釈迦如来等）の中から泰山王をとりだして薬師如来としたのではないかと考えられます。

御詠歌【あさゆうに となうるみだを たのみにて やすくたのしむ みくになるらん】

<参考文献：『松本十二薬師めぐり』 松本十二薬師をめぐる会発行>



安原町十王堂跡地に残る石仏等



安原町十王堂の案内板

2、特集 ～萩町の木戸と番所～

城下町の入口や、町人町から武家屋敷への入口や辻々には、木戸や番所がありました。木戸や番所はもともと城下への敵の侵入を防ぐための施設でしたが、戦の無い時代になると、武家屋敷と町人町の居住地を明確にして自由な往来を防ぐ目的になりました。

木戸は在と城下の境界を固めるものであり、城下の入口にありました。ここから城下になるので、馬から降りること、かぶり物を取るなどなどの決まりごとがありました。木戸の数は時代により異なりますが、『松本町帳面』には木戸25ヵ所と記録されています。木戸の開閉時間は、明け六つ（今の午前6時頃）と暮れ六つ（今の午後6時頃）でした。

現在の「萩町」の信号のところに、江戸時代には木戸と番所がありました。この信号のところは旧善光寺街道で、城下町の北側の出入り口でもあり、木戸番所もあり、外敵の侵入や不審者の取り締まりも行うようになりました。



萩町の信号、写真の左下に右側の案内板あり



木戸と番所の案内板

番所は、木戸の近くや辻、町中にありました。主な役目として、町人町の争い、狼藉者の取り締まりや火の用心などに当たりました。

また藩士の同心が詰める場所を張番所といいましたが、本町・東町・安原町の三ヶ所にありました。同心番所の任務は、城下の治安維持と商家の商取引の不正を取り締まることでした。同心は、公正な取り締まりを行うことが大切で、高いモラルが求められました。

<特集文献は『安原地区の歴史探訪』より引用>

3、歴史研究会報告

- ・ 5月27日 県宝橋倉家住宅、十王堂の清掃
- ・ 6月24日 バス研修会：鎌倉街道と小坂観音院、神長官守矢資料館等

【編集後記】

昔から、松本12薬師巡りを通して、当時の人が今と同じく疫病対策として祈祷巡礼をしていたことに驚かされます。その他、松本周辺には、信濃三十三観音礼所巡り、信州筑摩三十三ヶ所観音霊場、松本三十三ヶ所観音巡りなどがありますので、機会があれば出かけてみて下さい。全国的には、お遍路さんで知られる四国八十八ヶ所霊場巡りなどが有名です。